

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 21 日現在

機関番号：24403  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2010～2012  
 課題番号：22520047  
 研究課題名（和文）中国古代の文様、雲気文などがもつ復活再生観念の研究

研究課題名（英文）A study of the ideas of the resurrection concerning the cloud-shaped pattern of ancient China.

研究代表者 大形 徹（OHGATA TORU）  
 大阪府立大学・人間社会学部・教授  
 研究者番号：60152063

研究成果の概要（和文）：中国の文様、雲気文は雲だとみなされてきた。しかしその初期のものは中央アジアのヘラ鹿等の角の形状に似る。ヘラ鹿は中央アジアの代表的動物である。その特徴は長くて大きな角にある。鹿の角は毎年、落ちてはまた生えかわる。このことが復活再生観念と結びつけられた。墓葬に描かれる鹿の角の文様は、死者があの世界に生まれ変わることを助ける役割を担った。中国ではヘラ鹿類は少ないため、その文様は雲気とみなされるようになった。

研究成果の概要（英文）：We think that the cloud-shaped pattern of ancient China is the cloud, however first stages of it looks like elks' antlers living in Central Asia. Many elks live in Central Asia. Elks are characterized by long and big antlers. Elks shed their antlers and then grow new ones. Many people regard the feature of elks as the ideas of the resurrection. The pattern of antlers is painted on the wall built a burial ground. Then it helps the dead to be reborn. There were a few elks in China. That's why the pattern of antlers are regarded as the cloud.

### 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、中国哲学・印度哲学・仏教学

キーワード：雲気文・鹿・復活再生・龍・中国古代・文様・パルメット

#### 1. 研究開始当初の背景

これまで雲気文などの文様は美術や考古学の分野から、その様式や表現について考察され、思想史的な背景から考察されることは少なかった。中国古代の文様、雲気文

などがもつ復活再生観念をさぐり、それが死者の復活再生をうながす墓葬等の装飾に用いられたことを明らかにしたかった。雲気文は雲の文様化とみなされてきたが、その淵源はスキタイの鹿の角の文様化に求め

られる。角は大きく成長し、また生えかわることから復活再生観念をもつとされた。それは睡蓮の文様、パルメットとも組み合わせられた。睡蓮の花は夜に水中に潜って眠り、昼には目覚めるかのように開き、復活再生の象徴とされた。中国ではさらに龍と組み合わせられた。龍は魂を天に運ぶとされ、この文様は雲気とみなされるようになった。

## 2. 研究の目的

墓葬などに利用されている雲気文が本来、雲なのか、また、そもそもどのような目的で使用されているのかをさぐる。従来、雲気文は考古学や美術の文様研究の中で研究されてきた。「雲気文は戦国時代にはじまり、C字形やS字形の単位を組み合わせられて作られ、漢代には連続する形式の流雲文が生まれた。南北朝には唐草文と融合した形式もあらわれ、唐代には靈芝雲や如意雲文とよばれる独特の形の雲文も出現した（救仁郷『世界の文様3 中国の文様』小学館、1991）」とされている。殷周時代にはなく、戦国時代にはじまるが、どのような契機でこの文様がえがかれるようになり、また雲がなぜC字形やS字形をしていなければならないのかは、わからない。林巳奈夫氏は「漢代以前の羽根を主題とした紋様（「中国古代の遺物に表はされた「氣」の圖像的表現」、「東方学報」京都 61、1899）」と述べる。だが、なぜ羽根が文様化されなければならないのだろう。水野夏子氏の「馬王堆漢墓出土の染織品における雲気文と菱形文について」は雲気文の意味を「昇仙過程を表現する文様」ととらえ、また龍の一部が雲気文になっていることを指摘し、「不死や神仙になるための乗り物である龍を帛画、朱地彩絵棺、黒地彩絵棺の順に雲気化して描くことで棺室の中で「昇仙図」を完成させているのではないかと述べている。雲気文はたしかに死者の昇仙と結びつくとされる。ただ、議論が細かすぎるように思われる。かりに馬王堆のものに適用できても、他の場合にはあてはまらないように思われる。私は雲気文をもう少し大きな図像の流れの中でとらえ、その原理・原則を解明したい。現在、雲気文と呼ばれている文様は、本来、雲気ではなく、スキタイの鹿の角の文様に源を発していると思われる。パジリクのスキタイ墓には、「オオツノジカが入墨してあった。おそらく死者の魔よけを祈って入れ墨したらしい。角の先端や尾の先は極度に文様化してある。黒海のほとりに開花したスキタイ文様のはるばるアルタイ山下のこの付近に見られることは、文様の強靱性を示す（図説世界文化史

大系 13 北アジア・中央アジア、角川書店 1961）」とみえる。この入れ墨の鹿は丸く造形されているが、後ろ足が逆向きに跳ね上がり、きわめて特異な形をしている。また角や尾の先にはパルメットの花が咲いている。同じような造形はいくつかあり、スキタイの典型的様式といえる。この入れ墨の鹿とそっくりの形が馬王堆の棺の図に見える。これも鹿であり、後ろ足が逆向きに跳ね上がるところまで同じである。スキタイの木彫りのシカにつけられた解説には「アルタイ地方のカタンダ出土の木彫り。足を曲げてうずくまるようなオオツノジカは、実は疾走した形を示しているのである。このようなオオツノジカは、東西のステップ世界に広まったスキタイ芸術のトレード・マークである（前掲図説世界文化史大系 13）」とある。遊牧民や騎馬民族にとっては、山岳や森林は移動が困難であるが、ステップ地帯は幅の広い道路のようなもので、東と西の文化的な交流も比較的容易であったと考えられる。もうひとつ例をあげよう。「王権神授を表した壁掛け（部分）スキタイ・シベリア（前5世紀末～前4世紀初）ロシア、アルタイ、パジリク 5号古墳出土」とされるフェルトの絨毯絵は、左側に椅子にすわった女神がいる。手にはいくつものパルメット状の花の咲いた枝分かれした鹿の角状のものをもつ。右には、それに向き合うように馬に乗った騎士がえがかれている。その上下にパルメットの花が4つ集まった文様とオオツノジカの角の文様が、いずれも正方形の枠の中に造形され、それが繰り返す形で連続している。女神がもつ花と枝は「生命樹」とされているが、それは上下に描かれたパルメットと鹿の角が合体したものであろう。パルメットはエジプトの睡蓮にもとづく文様である。睡蓮の花が夜には眠るかのように水中に潜り、昼には目覚めるかのように開くことから、復活再生の象徴とされた。睡蓮は太陽の動きと花の開閉が連動することから、太陽を象徴するとされた。太陽は日の出と日没を永遠に繰り返すように見え、そのことが、復活再生観念と結びつけられた。睡蓮の図案化であるパルメット文様にも、その意味が賦与されているように思われる。リーグルは『美術様式論』において、このパルメット文様の流布していく様子を丹念にたどっている。また文様が自在に変化していく様子を自らもつ運動のようにとらえている。リーグルは中国に関しては全く考察していないが、この文様は中央アジアを通り、中国に伝わっている。鹿の文様は中央アジアに多い。角は樹木のように伸び、落ちてても

また生えてくる。その成長は生命力を感じさせ、復活再生の象徴とされたのであろう。さきにみた角とパルメットが合体化した文様は生命樹とみなされているが、パルメットと角の生命力の相乗効果を期待しての文様であろう。パルメットと鹿の角が合わさった文様は、馬王堆のグミ文に似ており、それはまた馬王堆帛画の扶桑に似ている。また馬王堆の雲気文は随所にパルメットが顔をのぞかせている。雲とパルメットと解釈すれば、それらが同時にあらわされている意味は理解できない。けれども、それらが中央アジアの角とパルメットが合体化した文様の変形と考えれば理解できる。馬王堆帛画では蟾蜍や亀が口に銜えているものも雲気とされているが、雲気が銜えられるはずもなく、これも鹿の角の図案化である。すでに戦国時代の鏡の卯龍文に鹿の角の文様と龍が合体したものがみえ、時代が下り、南北朝の雲気文にも雲気とパルメットが混雑しているとされる。その起源はすでに紀元前、4～5世紀のパジリクにあるといえる。さきにオオツノジカと記されていたものは、実際にはヘラジカかもしれないが、中国には、この類のシカは少なく、それをシカの角と認識できなかったのかもしれない。ただ、その文様もつ生命力はパルメットのもつ生命力とあわさって強い浸透をもって中国に入りこんできている。戦国から秦漢にかけての文様は、それまでの殷周の文様とは一変しているが、その大きな理由が、鹿の文様とパルメット文であろう。この時期、北方や西方の遊牧系民族とは日常的に交流があったと思われる、その中で、北方、西方の文様もまた中国に浸潤してきたのだろう。そして中国の内部では、龍と習合して、その一部となった。龍は本来、魂を天に運ぶ役割があったが、それは鹿の角やパルメットのもつ死者の復活、再生観念を補強する生命力と結びついたのでないか。それは当時の死生観にも影響をあたえ、文様として墓室内の装飾等に利用されていったのではないかとと思われる。

### 3. 研究の方法

雲気文と呼ばれる文様の例を数多く集め、年代と地域をもとに並べ、本来、どの地域に生まれた文様なのかをさぐる。

中央・北アジア地域に見られる鹿の角の図案化や文様を調査し、それがどのような意味で使用されているかを検討する。次に中国の戦国から漢代にかけての雲気文を検討し、鹿の角の要素が含まれていることを確認する。同時に中央アジアに多い鹿の

角とパルメットの複合文様が変形して中国の雲気文や龍文の中にみえることを検討したい。そしてそれらの文様がたんに埋め草として使用されているのではなく、図像全体の目的に合致した意味をもって使用されていることを確かめたい。墓葬に用いられるものは被葬者の復活再生を願うものであろう。また鹿の角とパルメット、あるいは龍と雲気（鹿の角）、龍とパルメット等の文様の複合化の様相を確認したい。そしてそれがこれまでいわれているような「混雑」ではなく、それぞれ文様もつ意味の相乗的効果を狙って意図的になされていること、また文様を複合化することで同じスペースで二重の意味を含ませうことを明らかにしたい。

### 4. 研究成果

(1) 雲気文は中央アジアに生まれ、もとは鹿の角の文様である。鹿の角は毎年、生えかわることから、復活再生観念の象徴とされ、死者の復活再生をねがう、墓葬に利用された。

(2) エジプトのパルメット文様は、睡蓮にもとづいている。睡蓮は夜に花を閉じ水に潜り、朝になれば水から顔を出し花を開く。そのことから復活再生の文様とされた。中央アジアでは鹿の角にパルメットが習合し、角の枝に花が咲く文様となった。

(3) 中国では古来、魂を天界に運ぶとされていた龍と結びつき、龍の体から雲気（鹿の角）とパルメットが生えているような造形となった。これらはいずれも被葬者があの世で復活再生することを助ける働きをもつと考えられたと思われる。

(4) 中央アジア・北アジア諸地域に見られる鹿の角の図案化や文様を調査し、それがどのような意味で使用されているかを検討した。具体的には、以下の考古学関係、服飾関係の書物、美術関係の図録や論文などを参照し、詳細に検討した。『美術様式論』アロイス・リーグル著、長広敏雄訳、岩崎美術社、1970、『古代中央アジアにおける服飾史の研究 パジリク文化とノイン・ウラ古墳の古代服飾』加藤定子著、東京堂出版、2002、『ロシア・パジリク古墳群出土遺物の保存科学共同研究』沢田正昭・肥塚隆保、奈良国立文化財研究所年報、1995、『パジリク古墳群(アルタイ)とゴルディオソ古墳群(トルコ)』、Zolotyie oleni Evrazi i、著者名 マルサドロフ L.S./Marsadolov L.S. 訳者名 加藤 九祚、アイハヌム、2003、『中央アジア』田辺勝美、前田耕作責任編集、小学館、1999。世界美術大全集、

東洋編 第15巻、その他、鹿の造形や文様、画像石、考古学関係の多数の図録、書籍を参照した。

それらの中で、鹿の角の文様あるいはパルメット文様のあらわされる図像をとりあげ、その意味や内容について検討を加えた。パジリクの図像(女神とされる女性が椅子にすわり、馬に乗る騎士に手にもつものを与えようとしている横向きの図像)は、王権神授(『考古学大図典』)とされているが、被葬者(死者)に王権をさずける意味はないと思われる。女神が手にもつものは、花の咲いた小枝とされているが、おそらく、パルメットと鹿の角の合わさったものであろう。鹿の角は、枝分かれているため、樹木のように扱われたのだらう。そのことは女神と騎士の上下にパルメットと角の文様が交互に描かれていることからわかる。パルメットと角の組み合わせられた文様は、復活再生の生命力をあらわしている。女神が被葬者である騎士に復活再生の象徴を与えているのであろう。またパジリクからは被葬者の皮膚の入墨が、そのまま残されている。それは角からパルメットの花が咲き、口のあたりがグリフィンのようになった鹿である。この鹿の形は、下半身が反転した特殊な造形だが、中央アジアには多くある。二頭の動物が組みついて争う動物闘争文から一頭を取り去ったものと考えられている。馬王堆にも同様のものがみえ、中央アジアや中国の北方の図像が長沙にまで影響を与えていたことがわかった。文様関係の文献も検討した。具体的には、『中国古代文様史』、渡辺素舟著、雄山閣、1976、『中国文様史の研究 殷周時代爬虫文様展開の系譜』、小杉一雄著、新樹社、1973、『日本の美術 No. 29 特集・文様』、溝口三郎編、至文堂、1973、『日本・中国の文様事典』、視覚デザイン研究所、2000、林巳奈夫「漢代以前の羽根を主題とした紋様(『中国古代の遺物に表はされた「氣」の圖像的表現』、「東方学報」京都 61、1899)、水野夏子「馬王堆漢墓出土の染織品における雲気文と菱形文について」等である。馬王堆の雲、あるいは扶桑とされる文様は、パジリクの角やパルメットの文様に酷似していることがわかった。これまで、そのことは全く指摘されていない。馬王堆の文様は北方系の鹿の角にもとづく文様とパルメットであらう。これらの文様は中国では雲気とされているが、雲気として扱われていくことから、しだいに実際の雲に近づいていくのである。

これまで文様については美術や考古学の観点から、色や形、時代による相違等につ

いて詳細に論じられてきた。しかし、文様がなぜ作られ、なぜ伝播していくのかという文様のもつ根源的な意味については、ほとんど考察されたことはなかった。復活再生観念をもつものが文様となる。そのことが文様が伝播していく根源的な力となると思われる。パルメット文様はエジプト起源であるが、シカの角の文様は本来は狩猟民族にもとづくのであらう。それが遊牧民族の間でも使用され、パルメットと組み合わせられた形で戦国から漢代の中国に流入したとみられる。馬王堆にみえるシカの文様はパジリクの死者の背中に入れ墨の文様にあらわされたシカそのままである。頭を後ろに向け、後ろ足を跳ね上げたシカが円の中に造形されている。秦の瓦当では対になったシカの角が造形されている。戦国時代の鏡では龍と結びつき、その体の一部のようにになっている。龍は空を飛ぶと考えられていたため、そのことが、雲気文とみなされるきっかけではないだろうか。馬王堆一号漢墓の帛画では蟾蜍が口にくわえるものが雲気文とみなされている(『長沙馬王堆一号漢墓』)。けれども、本来、雲は口に銜えられるはずがない。同じく棺上の漆画では怪獣が載る雲気文として描かれているが、その一部から、パルメットがのぞいており、この図もまたパジリクの鹿とパルメットの入れ墨の延長にあることがわかる。

これらの文様は生者の持ち物にも使用されたが、死者の埋葬に関わるさまざまな物にも描かれている。それは角にもとづく文様がパルメットと同様に再生復活を促す象徴的な意味をもっているからであらう。なお後世、雲気文は「雲」と認識されたため、雲としての様式化が進んでいく。最終年度では、そのような雲気文の実際の形について、できるだけ多くの図像を集め、それらを詳細に比較してみたい。明清あるいは現代の雲気文は明らかに戦国・漢代のものとは異なっている。戦国・漢代のものは、きわめて細長く枝状であるが木の枝とは言い難い。また、幾何学文様というには複雑すぎる曲線で構成されていた。それが明清のものでは、柔らかい曲線で構成され、丸い形に造形されている。右上の図版で示した康熙帝の段通の雲気文は、まさにその形になっている。ただ、雲だけが独立してあらわされることは少なく、龍とのセットになっていることが多いようである。

(5)「鹿の角にみる再生観念について—スキタイ、戦国楚墓、馬王堆漢墓をつなぐもの—」

ここではスキタイと戦国時代の楚墓、おなじく楚の地にある馬王堆漢墓に共通して

あらわれる鹿の造形について考察した。鹿は中国では「鹿」と「禄」の発音が同じという観点から考察されることが多かった。その時、かえって鹿そのものの造形に関しては、注意がはらわれている。

中央アジアにはヘラジカの類も多い。そして「鹿」そのものの図像だけでなく、角の形だけ独立したのも文様化されていく。ヘラジカの角の文様化されたものは、中国の中心地域にその種の「鹿」が少ないことから、正確に「鹿」の角とは認知されなかったように思われる。中国でもその文様は盛んに使用され、文様そのものが増殖発展していくようにみえる。文様に復活再生という吉祥の意味があるならば、その文様が長く伸びていくことはよいことなだろう。けれどもその文様は中国では早い時期から「雲気」と誤認され、のちには本当に「雲気」になってしまうのである、「鹿」の角自体も中国では戦国時代に復活再生を象徴する意味をもって使用されていたように思われる。

「鹿」の角および、そこから生まれ出た文様は生者に関してはもとより、被葬者の復活再生を助けるものとして、墓葬に関わるさまざまなものに使用されていくことになったと思われる。

古代の人々の絵や造形を現代的な芸術観だけで捉えようとすれば、大きな誤りを犯すことになるだろう。そもそも絵を描いたり、何かを作ったりするのは、それが実現するようにという、予祝の意味をもつことが多い。狩りの獲物があるようにと、洞窟に狩猟図を描くというのが、古代において絵を描く根本的な意味なのだろう。つまり呪術である。その際、狩りが成功するようにと祈っていたのだろう。「文字」が生まれる以前から「絵」や「造形」によって、それらのことが連綿と行われていた。また、そもそもスキタイには「文字」はなかったため、「言葉」と「絵」や「造形」によって死生観が表現されていたのであろう。

ここでは、その観点から中国の墓葬に関わる絵や造形を呪術として捉えてみた。技術的、芸術的にいかにすばらしくても、その根柢には呪術がある。その観点から、中国の墓葬に関わるものを眺めてみれば、たとえば後漢の墓室に描かれる壁画は、墓主の生前の生活ではなく、生前と同じように暮らしたいと願う墓主の死後の生活であるはずである。

(6)「生命力をもつ文様の伝播—エジプトのパルメット、中央アジアの鹿角文様と中国の龍、雲気文との関係について—」では、ここでは、霊芝とパルメット文様、馬王

堆の帛画とエジプトの図像、パルメットと鹿の角の文様、中央アジアの文様と中国、バジリク的女神と騎士、エジプトの女神イシス、アルタイのスフィンクス、パルメット、鹿の角と龍、雲気文との関係について考察した。

(7)「雲気文と鹿の角」では、雲気文の起源が鹿の角にもとづくことを考察した。その淵源はスキタイの鹿の角の文様化に求められる。角は大きく成長し、また生えかわることから復活再生観念をもつとされた。そのことから雲気文は、死者の復活再生をうながすと考えられ、墓葬の装飾等に用いられた。またこれは睡蓮の文様、パルメットとも組み合わせられた。睡蓮はエジプトで太陽の象徴とされ、沈んだ太陽が、また昇ることから、やはり復活再生観念をもつと考えられている。中国では、雲気文はさらに龍と結びつけられた。龍は、死者の魂を天界に運び、その復活再生を助ける動物である。龍の体の一部が雲気文になっており、さらに尻尾の先にパルメットの花が咲いているものがある。これは、復活再生に関わる文様を宝づくしのように重ね合わせて表現することで、その効力が増すと考えられたからであろう。

(8)『『莊子』逍遥遊篇冒頭の話と馬王堆帛面-魚・鳥・太陽・扶桑をめぐって-『郵政考古紀要』)』では、馬王堆帛面の魚・鳥・太陽・扶桑のモチーフが、『莊子』逍遥遊篇の鯤(魚)・鵬(鳥)・青天(太陽)・扶搖(扶桑)と重なり合うことを明らかにした。鯤・鵬は鴻蒙(外篇在宥)と関連し、また渾沌(内篇応帝王)に通じる。これはさらに渾敦(『山海經』西山經)→帝江(『山海經』西山經)→帝鴻(『左伝』文十八年)→黄帝(杜預注)→上帝(鐵井慶紀「黄帝伝説について」)→太陽神(同)とつながっていく。つまり、すべて太陽の復活再生と関連している。それらによって『莊子』や馬王堆帛面の復活再生にもとづく死生観が形成されていると考えた。

## 1. 主な発表論文等 研究発表

〔雑誌論文〕(計4件)

①大形徹「鹿の角がもつ再生観念について—スキタイ、戦国楚墓、馬王堆漢墓をつなぐもの—」、査読無し、「人文学論集」第31集、大阪府立大学人文学会、2013、59—89、<http://repository.osakafu-u.ac.jp/dspace/>

②大形徹「生命力をもつ文様の伝播—エジプトのパルメット、中央アジアの鹿角文様

と中国の龍、雲気文との関係について一」、査読無し、「論叢 国語教育学」復刊第2号（通巻7号）、広島大学国語文化教育学講座、2011、96—110 [http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/metadb/up/kiyo/AN10415666/Ronso-Kokugokyoikugaku\\_7\\_96.pdf](http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/metadb/up/kiyo/AN10415666/Ronso-Kokugokyoikugaku_7_96.pdf)

③大形徹「雲気文と鹿の角」、査読有り、「形の文化研究」6号 形の文化会、2011、45—58

④大形徹「『荘子』逍遥遊篇冒頭の話と馬王堆帛画—魚・鳥・太陽・扶桑をめぐって—」、査読無し、「郵政考古紀要」50号、大阪郵政考古学会、2010、33—50

〔学会発表〕（計2件）

①大形徹「鹿角文様の肖形印—オリエントの封泥と中国の封泥—」2011年度人文学会、大阪府立大学学術交流会館、2011年7月24日

②大形徹「生命力をもつ文様の伝播 エジプトのパルメット、中央アジアの鹿角文様と中国の龍、雲気文との関係について」国語文化教育学講座、広島大学、2010年12月18日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大形徹 (OHGATA TORU)  
大阪府立大学・人間社会学部・教授  
研究者番号：60152063

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：